

華岳山恩林寺発行



顛飽袋 766

令和8年4月号



写真：瑞龍寺（鉄眼寺）大阪市



お寺へ行こう 和尚さんと友だちになろう

中山かんのん  華岳山 恩林寺

中山中学校下

☎506-0052 岐阜県高山市下岡本町2779

✉kagakuzan@onrinji.com ☎(0577)34-1245



<https://onrinji.com/>

激動の時代にあつて、人々の心に深く寄り添った僧侶がいます。それが鉄眼道光禪師。江戸時代前期に活躍した黄檗宗の僧侶。彼

を語る上で欠かせないのが、昭和天皇から贈られた寶藏國師という諡号しごうです。國師とは、国家の師

として仰がれる高僧に贈られる称号であり、寶藏とは仏法の宝が詰まった蔵のような存在を意味します。つまり、鉄眼はまさに

「人々の心に宝を授ける師」として認められたのです。彼は自分の名声や地位を求めのではなく、ひたすらに他者のために生きる慈悲の実践者でした。もし彼が自

分一人の安楽を求めていたならば、これほどの諡号を受けることも、人々の記憶に刻まれることもなかつたでしょう。

天和2年、
鉄眼禪師は53年の



鉄眼禪師

生涯を閉じました。その際、彼は

『七転八倒 五十二年 妄談般若

罪犯弥天 優游華藏界 踏破水

中天』という言葉を残しています。

この言葉には、彼の悟りの境地と

深い謙虚さが凝縮されています。

後半の四句を読み解いてみます。

妄談般若とは、言葉で語られる

教えも、所詮は真理を指し示す

ための仮の手段に過ぎないという

意味。罪犯弥天は、自分には到底償いきれないほどの罪があると、

謙虚に自省する姿勢。優游華藏

界は、この世界そのものが、実は

仏の悟りに満ちた華やかな世界

であることを楽しむ心のあり方。

そして踏破水中天は、水面に映

る月を歩いて渡るように、この世

の現象にとらわれず、本質を見

極め自由自在に生きる姿を描い

ています。これらは、単なる反省

や空想ではなく、現実をありの

ままに受け入れ、なおかつ超越し

て生きる禅の極意を示していま

す。鉄眼禪師の生き方は、時代

が変わっても色あせることのない

真実を教えてくれています。

昭和天皇から贈られた寶藏國師という言葉の重みは、彼がどれだけ自分の限界を超えて他者に尽くしたかを物語っています。彼の遺した言葉を胸に刻み、知識に囚われず、謙虚さを忘れず、目の前の日常を大切に生きていく。そうすることで、私たち一人ひとりもまた、自分の中にある宝物を見つけることができるはずです。

昭和の和尚、下岡本を語る

近年の昔話は、戦後八十年とか、太平洋戦争経験者やその家族のことは語られますがその後の復興、途中の経緯についてはあまり話題にはなりません。農地開放や旦那様と言われた旧家の方々

には厳しい時代であったように思えます。郡部の方でも今でも杉下田圃、岡村田圃などと

言われる田んぼが残っていることから



も、規模の大きさがわかります。

我が下岡本町はご多分に漏れず、小作農業から専業農家が増えました。若い人たちには青年団活動や消防団活動などが活発となりました。また、先輩の兄さんたちの声掛けでお寺へお経の稽古に行きました。町内はお東さんの御門徒さんが多く、主に正信偈を唱えるのですが、お西さんの壇家さんは少し節が違うので困りま

した。しかしみんな和気藹々、集まるのが楽しい勉強会でした。

私どもでは宗旨が

違いますので少し



なじみがありませんが、門徒の寺院様とご一緒させていただく時など今でも助かっております。願生寺の寺院様は皆さんが「ごえんさま」と言って慕われておられました。朝早くにステッキをつけて村の中を散歩なさる姿を見かけたものです。



住職合掌



華岳山 忍林寺

住職 古田 正彦

新堂 小森 鳳雅

小僧さんの



【第五章 四節】 行者

法要の始まりを告げるのは、静寂を切り裂く緋靴の音。堂内に響く太鼓の音に導かれ、本山住職である管長かんちやうげいか猥下わいげが入堂されます。その歩みに寄り添うのは、秘書役の丈侍じやうじ(和尚)と世話役の雲水、行者である私でした。

香箱を捧げ、杖を携え、猥下の影として控える。線香を差し出し、曲録まがくろく(椅子)へ導く。一挙手一投足に全神経を集中させるその役割は、配役の中でもっとも細やかな配慮を求められる場でした。行者の一日は、すべて猥下と共に

あります。食事の支度や掃除、法要への随行。修行の身でこれらを全うするのは過酷な日々でした。しかし、その慌ただしさと引き換えに、師の傍らで直接教えを仰ぐ貴重な

時間を得ることができました。

ある時私は問いを投げかけました。

「禅語にいう

主人公とは、何なのでしょうか」

猥下は私を指さし、静かに仰いました。

「そこに居るのは仏か？ 私か？」

考えてみなさい」

その言葉は鋭く胸に刺さり、真実の自己を問い直す契機と



なりました。

一方で、こんな温かな記憶も残っています。

夜空を仰いだ猥下が「あれは明けの明星かな？」と尋ねられました。明らかに点滅して動く光に、私が「あの光は飛行機ですね」と

答えると、猥下は

「確かに、動いて

いるもんね」と、

いたずらっぽく

笑われました。

ありのままを見る大切さを説かれたのか、あるいは単なる読み違えだったのか。答えは分からぬままですが、二人で笑い合ったあの柔らかな時間は、今も私の心に深く刻まれています。

